

◆今号の内容◆

- ・ 2013年度CODE基本方針
- ・ 特集 ハイチ地震プロジェクト
- ・ 災害救援プロジェクト 近況
- ・ クローズアップ 「大学生被災地へ行く」
- ・ 2013年度総会を開催しました
- ・ 2012年度事業報告・2013年度事業計画
- ・ トピックス 懇親会「CODEのタベ」を開催しました
- ・ イベント情報
- ・ 役員・スタッフ活動記録
- ・ 会員募集・ご寄付のお願い
会員・寄付者紹介

CODE Letter

2013.7.1 VOL47

(特活)CODE海外災害援助市民センター 発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-578-7744 FAX:078-574-0702
E-mail: info@code-jp.org
URL: <http://www.code-jp.org/>
郵便振替: 00930-0-330579

2013年度CODE基本方針

「CODE10年から震災20年へ」

2013年度を迎えるやいなや、淡路島、イラン、三宅島、宮城沖、中国四川省の地震、アメリカの竜巻などと立て続けに自然災害が発生している。

阪神・淡路大震災を機に立ちあがったCODE海外災害援助市民センターは、1995年のサハリン地震から2011年のトルコ東部地震まで51回にわたり海外への救援活動を行ってきた。

CODEはこれまで耐震の普及、防災共育(教育)、地域経済の再建などの支援を通じていのちの大切さや地域文化の尊重などを共に学び合い、実践してきた。世界の被災地でひとつひとつの「寄り添い」、が、この18年間で確実に「つながり」となってきたことを実感した。2011年3月11日、あの未曾有の東日本大震災のあと、CODEがこれまでかかわってきた海外の被災地からたくさんのメッセージ、義捐金をいただいた。「支え合い」の連鎖が確実に広がってきている。

CODEのNPO法人10年を機にシンポジウム「寄り添いからつながりへ」も開催された。基調講演にもあったように、民主主義における最大多数の幸福の原理では、必ず最後のひとりが切り捨てられる。NGOはその最後のひとりを代表しなくてはいけない。NGOとして最も大切にしている「最後のひとりまで」に今後もこだわり

続け、CODEの理念を被災地の現場で実践していくことをあらためて誓う。今後も被災者に寄り添い、つながり、このKOBEから支え合いの連鎖を着実に広げていきたい。

シンポジウムでは、アフガニスタンやハイチの被災地に長く横たわる紛争や貧困が、自然災害によってより深刻になっている現実には大きな課題も突きつけられた。

私たちは、この10年間培われてきた「防災・減災・復興」の智慧やネットワークを次世代にしっかりと引き継ぎ、新たな10年に向けてCODEらしさを追求すると同時に、若者の発想を十分に取り入れた試みも展開していく。

これまでKOBE市民は、被災地から自立と支え合いの寄付文化を築いてきた。これからはCODE・AIDという新しい枠組みの中で、志ある若者を育成していく社会的基盤の整備もめざす。

2014年度には、阪神・淡路大震災20年を迎える。今年これを視野に入れ、CODE10年の持つ意味を深く問いかけたい。

特集 ハイチ地震救援プロジェクト

ハイチ地震が起きてから、今年の7月で3年半が経過します。発災以来、救援活動が続けてきたCODEは現在、現地のNGO「GEDDH」らによる農業技術学校建設のプロジェクトを支援しています。5月にCODE代表理事の芹田と事務局長の吉椿がハイチを訪れ、GEDDHと学校建設計画や運営などの協議を行いました。以下は現地からの最新情報です。

ハイチ大地震

2010年1月12日にハイチ共和国を襲ったM7.0の大地震によって約22万人の人々が犠牲になりました。ハイチは西半球で最も貧しい国と言われ、貧困に加え、地震やハリケーンなどの自然災害も多発するところです。地震の9か月後、大規模な洪水に伴ってコレラの感染が全土に拡大し、2013年5月28日時点で8120人(UNOCHA)が亡くなっています。

ハイチの今

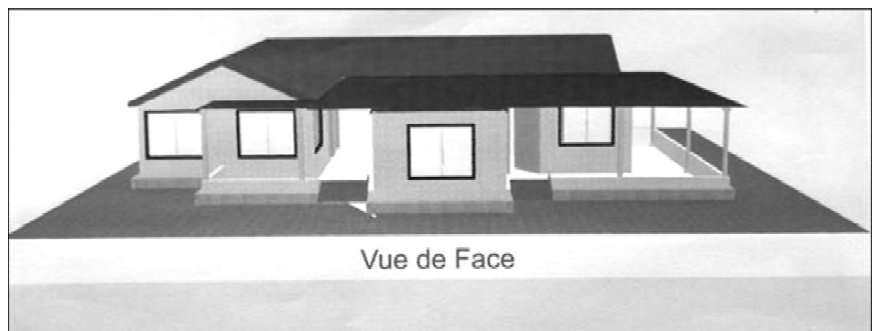
IOM(国際移住機関)の発表(2012年10月)によると地震から3年を経たハイチでは未だに496か所に約36万人の人々が避難キャンプのテントやトタンの簡素な家に暮らしています。元々、仕事を求めて農村部から都市に流入してきた人々が思うように仕事に就けずスラム街が形成されていきました。地震災害によってそのスラムと避難キャンプは、区別がつかないような状況にもなっています。一方、経済格差の著しいハイチでは、裕福層はすでに家の再建も終え、高台の豪邸に住んでいる人もいます。首都ポルトープランスの大統領府の倒壊した様子が地震直後、象徴的に報道されていましたが、ようやく最近、アメリカの財団の資金で解体されました。ですが、すぐ近くの大聖堂は解体費用の目途が立たず、未だ痛ましい姿のままです。そんな状況でもハイチの人々は、路上で野菜、果物、服、靴、鞆、家具、車用品など本当に様々なものを売って何とか生計を立てようと必死で働いています。

これまでのCODEの支援

CODEは、地震直後にメキシコの海外研究員であるクワテモックさんを被災地に派遣し、移動診療所や孤児院の支援を行いました。また、2012年には現地NGO「ACSIS」とマイクロファイナンスによる生活再建支援を行い、日本との交流拠点でもある「日本ハイチ協会」の家賃支援なども行って来ました。日本ハイチ協会では、ハイチの若者が日本語を学んだり、ハイチを訪ねる日本の視察団などをつなぐ拠点にもなりつつあります。

農業技術学校の建設が間もなく始まります！

メインプロジェクトとしてCODEは、農業技術学校の建設を行います。地元で農業や植林活動を行っているNGO、GEDDH、クリスト・ロア宣教修道女会のシスターの須藤昭子さんや機械、石工、電気、木工などの技術学校(CGF PL)の校長先生であるブローさん、カナダの農業技術者シルビオさんら関係者とCODEで委員会を立ち上げ、学校建設や運営を行っています。



▲ 農業技術学校ETAL 完成予定図



▲ 解体された大統領府



▲ 港近くの避難キャンプ



▲ 日本ハイチ協会の人たちと

その農業技術学校はすでにETAL (Ecole Technique d` Agriculture de Leogane) という名前もつけられています。被災地であるレオガン市内にあるGEDDHの管理している土地を使って、敷地内の中央、約320平米の土地に教室2つ、図書室、事務室、食堂などを設置した学校を建設します。周りには実習用の畑もあり、すでにGEDDHのメンバーがトマト、キュウリ、ナスなどのおいしそうな野菜を育てています。また、学校は1学年25名の2年制で、18歳から25歳の若者を対象にしています。まもなく着工し、9月には開校する予定です。この学校で国の基本である食を生み出す農業を担う若い実践者を育てていきます。



▲農業学校建設予定地

GEDDHとハイチの農業について

GEDDHとは、2005年に地元レオガンの人たちやシスターの須藤昭子さん（37年間ハイチに滞在し、結核などの医療活動に従事してきた86歳の日本人医師）たちが立ち上げた環境保全のグループで、植林や農業研修、炭焼きなどの活動を行っています。レオガン郊外のMapou村では、頻繁に起きる洪水によって流域の土壌が侵食されています。GEDDHは、田畑を守るために竹を植林して土止めをすることで土壌の浸食を防ごうとしています。

この背景には、ハイチの森林乱伐があります。ハイチとは、先住民の言葉（アラワク語）で「山多き土地」という意味の通り、昔は本当に緑豊かな国だったそうです。フランス植民地時代は大規模プランテーションのために開拓され、独立後は燃料用の木炭を得るために伐採されてきた歴史があります。森林のなくなった山は保水力を失い、栄養素を含んだ表土を流し去っていきます。そして河川の流域の土地をも侵食していきます。ハイチでは燃料の75%は木炭で、高価なガスは貧しい人々には手が出せないのが現状です。貧しい人々は生きるために木を伐らざるを得なく、木を伐る事で起きる洪水が土地を奪っていきます。こうやって人々がより貧困状態に陥っていきます。

そして1995年のアメリカの圧力による関税の引き下げ（輸入自由化）がハイチの農業の崩壊を引き起こしました。アメリカから輸入される安い米が市場に溢れ、ハイチで作られるお米は高騰し、ほとんどが輸出されていきます。自国で作ったお米を貧しい人たちは食べる事ができないのです。この農業崩壊によって農村部の人たちが仕事を求めて首都に流入してきてスラムを形成するという状況が続き、2010年の地震はこの貧困層を直撃しました。このような悪循環がハイチの貧困の根底にあります。だからこそハイチの若者が、しっかりと農業を学び、農村で生計が立てられるようにすることが今のハイチにはとても必要なことなのです。



▲洪水が農地を奪っていく

今後の課題

農業技術学校（ETAL）は皆様からいただいた寄付金によって建設しますが、その後の教師の給料や事務管理費などの運営資金の目途が未だ立っていません。シスター須藤やブローさんも今後の運営資金を何とかしようと奔走しています。校長になるブローさんは、「最初の2年間は資金面で大変ですが、専門的な教師を雇用し、しっかりとした学生を育てなくてはならない」と語っています。なぜなら2年後、学校を修了した学生が先生となり、次の学生を育て、自立の道を歩んでいくことになるからです。CODEも今後、何らかの支援策を考えていきたいと思っています。引き続き、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。（吉椿 雅道）

ひと：Joseph さん（37歳）



GEDDHの中心的人物。JICAの農業研修で2度来日している。レオガンの農民との信頼関係は非常に厚い。今後、農業技術学校の農業実習を担当する。

災害救援プロジェクト 近況

アフガニスタン (since 2002)

ここ1年で新たに18世帯がぶどう基金の融資を利用し、2003年の融資開始以来のべ537世帯(2013年6月現在)となりました。アフガニスタンではいまだ厳しい状況が続く、ぶどうの新たな販路を模索している最中ですが、農家の方々は様々な工夫をして栽培を行っています。例えば、日本で学んだ有機農業に取り組んでいるぶどう農家は、飼っている動物の糞を肥料として使用しています。

○アフガニスタンからの便り

アフガニスタンでカウンターパートとして、ぶどう農家の方々とやり取りを行ってもらっているNGO「SADO」のルトフ・ラフマンさんからレポートが届きました。

アフガニスタンでは女性が親族以外の男性と接触することが基本的に禁じられているため、女性からお話を聞くことはたいへん難しいことですが、ぶどう基金の融資を受けているあるぶどう農家の女性が自身の境遇を語ってくれました。アフガニスタンで暮らす女性が直面する厳しい現状と、女性として、母としてこの現状に立ち向かう力強さを感じます。



▲ぶどう畑を耕す

○アフガニスタンの女性のこぼ

「14歳で結婚したとき、夫はぶどう農家だと思っていました。ぶどうの木があったからです。しかし、タリバンによって破壊されていました。夫がドラッグを使っていたとは知りませんでした。あるとき彼は数ヶ月間姿を消し、私はひとりでぶどう畑の再建のために将来の希望を持って働きました。その後、夫が逮捕されたとき、私には一人目の赤ちゃんがいました。生活を夫の家族に頼ろうとしましたが、彼らは私と息子を助けるためのお金が無いと言いました。彼らは私を殴り、夫がいなくなったのは私のせいだと言いました。しばらくして夫が帰ってきましたが、また私を残して出ていきました。

生活していくための支援を別のところから得ようと探したところ、ミールパチャコットのぶどう組合のことを聞き、組合に出向いて待合リストに載せてもらいました。6ヶ月後、シューラのメンバーがやってきて、1万アフガニ(約200ドル)を、ぶどう畑に使えるローンとして貸してくれました。私はその年のうちにいくらか返済し、次の年にも返しました。3年以内に返さなくてはなりません。私はいまこの基金を使い、息子とともにぶどう畑の再建をしています。息子とともに暮らすのはとても幸せです。以前と比べていまはとても安定しています。シューラは、ぶどうの木の手入れの仕方や、より良い品質のぶどうをつくるための有機農業のやり方などを教えてくれました。組合はマーケットも探そうとしています。

いま、私は自分の権利のために、そしてこの国の他の女性たちのために闘う力があると知っています。いま、私はひとりの人間であることを理解しており、アフガニスタンの他の女性たちも暴力から離れて生きるべきだと思います。

私は学校に行ったことがありません。しかしいま、読み方を学んでいます。カブールで高校を卒業してからミールパチャコットに住むようになった近所の女の子に授業を受けています。この勉強を続けて、ぶどう畑から収入を得たいと思います。ぶどう畑は私にとって、暮らし、働き、息子を育てるのにいちばん安全なところです。息子には教育を受けさせて、将来この国の役に立ってもらいたいと思います。

夫とは離婚したいのですが、アフガニスタンでは女性が男性から離婚するのはとても難しいことです。夫から離婚するために一生懸命お金を集めています。アフガニスタンの人々にメッセージを送れるならば、こう言いたいです。親は、娘の権利のために闘わなくてはなりません。娘を学校に行かせなくてはなりません。結婚を強いてはなりません。自分で夫を選ぶことを許すべきです。」

(一部省略)

四川省 (since 2008)

CODEによって光明村に建設された「老年活動センター」は、釘を一本も使わない伝統木造軸組み構法による耐震モデルハウスとして、また若者の多くは出稼ぎに出てしまい、残された高齢者や女性、子供たちのための居場所として、そして緊急時の村の避難所などとして活用される事を目的としています。中庭を囲むように三方が家屋の三合院という伝統様式は非常に雰囲気があり、建物だけでも人を引き付けるような存在感があります。CODEによって建物は建てられましたが、それをどのように運営していくは今後の村民自身の力にかかっています。「CODEにいつまでも世話になるわけにはいかない」と村民たちが収益事業として「農家楽」を開業し、自立への道を歩み出しています。

農家楽とは、都市の住民が週末、郊外の農村を訪れ、のどかな景色の中で郷土料理やお茶を味わい、マージャンやトランプに興ずるといふレジャー（アグリツーリズム）です。この農家楽は四川省の省都の成都が発祥で、近郊には約1万軒の施設があり、週末には約50万人の人々が賑わっているそうです。四川省は中国茶道の発祥の地でもあり、あくせく働くよりもお茶を飲みながらゆったりと人生を謳歌するのが四川人の気質で、農家楽はそんな四川の風土から生まれてきたものなのです。

光明村でもこの伝統建築に加え、周辺には蓮の花の咲く池を整備し、外部からの観光客を呼び込もうとしています。レストランでは、すでに村の中から数名の雇用も生まれており、野菜なども村民自身が作ったものを使う事で村民にも収入の機会を提供しています。いずれ村民の家に民泊できるような準備も進めています。復興の道を歩む光明村に皆さんもいつか一緒に行ってみませんか！？

（吉椿雅道）



▲三合院様式の老年活動センター

青海省（since 2010）

青海省地震が発生して3年が過ぎました。CODEではこれまでに4回、青海省にスタッフを派遣しました。被災者にヤクを貸し出す「ヤク銀行」を進めています。ヤクの乳からつくるヨーグルトやバターは食すだけでなく、バターは寺院の灯明となります。チベットの人々にとって重要なヤクを提供することで、被災者の生活や信仰を支えることになります。現在、「ヤク銀行」をはじめため現地の人が「ヤク」を購入する準備をしているところです。

ヤク1頭は平均4000元＝約6万2000円ほどです。2011年の青海省農村部1人当たりの年収が4068元＝約6万3000円（2011年「青海省統計年鑑」より）なので、ヤク1頭を購入するのに年収分のお金が必要となります。被災し、収入源であるヤクを失った方にとっては非常に負担となります。遊牧民などの被災者にとって、間もなく始まる「ヤク銀行」が、青海省の被災者生活再建の足がかりとなることを望んでいます

ただいま「ヤク銀行」では1口3000円のヤクオーナーを募集しています。20人のヤクオーナーで1頭のヤクを買うことができます。引き続き、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

（上野 智彦）



▲ヤクの群れを率いる遊牧民

2月2日に若者ポスターセッション「海外災害支援 次世代からの提案」が行われました。9チームがエントリーし、「〇〇で災害が起こったら、復興に向けてどのような復興プロジェクトを行うか？」をテーマに災害復興プロジェクトを考え、「KOBE足湯隊」が最優秀賞に選ばれました。副賞としてCODEから神戸大学4回生（当時）の後藤早由里さんに四川大地震（2008）の被災地に行っていただき、その目で復興の現状を見ていただきました。海外の被災地をその目で見てもらいました。前号のレポートに引き続き、被災地視察を終えての感想を紹介します。

私がポスターセッションに参加した動機は、“なんだか面白そうな気がする”そして、“ちょうど予定が開いている！”というとてもなんとなくな理由だった。

ポスターセッションのテーマは「もし〇〇（海外）で△△（災害）が起こったら…」ということで、インドネシアの火山災害についてを選んで考えた。私は、今まで足湯隊の活動やまけないぞうなどでいくつかの国内の被災地には行ったことがあった。しかし、“海外”となると、そもそも私は生まれてから一度も日本から外に出たことがなく、どんな感じなのかは想像しているいろいろ考えた。その中で、海外といえど、やはりその土地に住む人とその土地に住んでいない私とが関わっていくということだから、日本での活動ともしかしたら似たような雰囲気なんじゃないかと考えるようになった。そうすると、海外の災

害への支援も少し身近なものに感じられるようになった気がした。

そして、ポスターセッションで賞をいただき、このように四川で被災地を見てまわり、文化の違いや制度の違いそして言葉の違い、いろいろと日本と違うことがあるけれど、関わろうと思って近づいていけば、相手も近づいてきてくれて、言葉が通じなくてもだんだんと関係は作っていけると感じた。しかし、やはり言葉がわかればもっともっと相手のことがわかり、私のことも知ってもらえる、そしてもっとおもしろいだろうなと思い、言葉が通じたらいいなと何度も思った。実際に行かなくても想像できることはたくさんあるけれど、実際に行ってみて、歩いて、においをかいで感じることは、その想像を吹き飛ばすリアルなもので、貴重な体験だった。

（後藤 早由里）

6月15日(土)、兵庫県民会館にて2013年度CODE総会を開催致しました。正会員21名(うち委任状12名)、オブザーバー2名に参加いただき、議案である2012年度の事業報告・決算、2013年度の事業計画・予算、役員改選について審議が行われ、すべて承認されました。また10ページに記載している「CODE AID」が本総会で承認されましたので具体的に進めていきます。主だった報告と計画については本誌に概要を掲載しておりますが、総会資料をご覧になりたい方はホームページをご参照いただくか、事務局までご連絡ください。今後ともみなさまからのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。

《2013年度運営体制》

| | | | | | |
|-------|--------|---|------|-------|-------------------|
| 代表理事 | 芹田 健太郎 | 神戸大学名誉教授/愛知学院大学教授 /京都ノートルダム女子大学学長 | 理事 | 藤野 一夫 | 神戸大学大学院国際文化学研究所教授 |
| 副代表理事 | 室崎 益輝 | ひょうご震災記念21世紀研究機構 研究調査本部長 /ひょうごボランティアプラザ所長 | 理事 | 藤野 達也 | |
| 副代表理事 | 水野 雄二 | (財)神戸YMCA総主事 | 理事 | 松本 誠 | 市民まちづくり研究所所長 |
| 理事 | 黒田 裕子 | 阪神高齢者支援ネットワーク理事長 | 理事 | 村井 雅清 | 被災地NGO協働センター代表 |
| 理事 | 野崎 隆一 | 神戸まちづくり研究所事務局長 | 理事 | 村上 忠孝 | 村上環境住宅研究所所長 |
| 理事 | 榛木 恵子 | 関西NGO協議会顧問 | 理事 | 山添 令子 | コープこうべ常勤理事 |
| 理事 | 吉富 志津代 | 多言語センターFACIL代表 | 監事 | 中川 和之 | 時事通信社山形支局長 |
| | | | 監事 | 飛田 雄一 | 神戸学生青年センター館長 |
| | | | 事務局長 | 吉椿 雅道 | |

アフガニスタン救援プロジェクト(ぶどう畑再生支援事業)

【報告】

2003年、コーポラティブシューラ(ぶどう生産者協同組合)を立ち上げ、300万円を原資として288世帯への融資としてぶどう畑再生支援事業はスタートしました。これまでに、延べ537世帯(2013年6月末現在)が融資を受け、カウンターパートであるNGO「SADO」が現地調整を行っています。

2007年から2009年までの3年間、JICA草の根技術協力事業(地域提案型)として農家の方々を日本に招き、有機農業技術の研究を行いました。収穫高は増加しましたが、2010年頃から主要な市場であったパキスタンへの輸出が閉ざされてしまい、新たな販路の開拓が課題となっています。

10周年記念シンポジウムでは、SADOのラフマンさんをパネリストとして日本に招待しました。その際、東日本大震災被災地を訪れ、互いの被災状況や復興について話し合う機会を持ちました。

【計画】

量としてはこれまでの販路を代替するものではありませんが、レーズンを手にとってくれた日本の方にアフガニスタンの現状やぶどう畑再生支援プロジェクトを知ってもらうきっかけとして、ミールパチャコット産有機レーズンの輸入、販売に取り組みます。

四川省地震救援プロジェクト

【報告】

10周年記念シンポジウムのゲストとして光明村の医師である彭廷国さんが2度目の来日をしました。その後、東日本大震災の被災地を訪問し、被災者どうしの交流を行いました。シンポジウムでは、「老年活動センター」が当初CODEが予想するよりも多岐にわたる

活用が住民自らの手によってなされていることが語られ、光明村の村民が自立への道を歩み出しています。

現在、センターは、村民が集まり、麻雀などを行う娯楽施設として利用されている一方で、「農家楽(中国版アグリツーリズム)」としても活用され、少しずつ雇用も生まれています。また、今後、センターの前には村民によって蓮の池がつくられる予定で、外部の観光客を呼び込む予定です。

また、3月には上記シンポジウムとともに開催した「若者ポスターセッション」で優勝した神戸大学の学生を被災地に案内し、被害や復興の様子について学んでもらいました。

【計画】

①老年活動センターの運営

老年活動センターは、既に高齢者を中心に憩いの場として利用されています。一方で、村民有志による投資で農家楽の運営(農家レストランなど)も始まっていますが、住民参加、収益の分配、広報などまだまだ多くの課題もあります。今後、中国の農家楽の専門家による住民対象の勉強会などを行い、村民の自立を見守っていきます。

②震災展示室の設置

当初の予定であったセンター内の「震災展示室」の設置も現地の人々との協議をしながら行います。

ハイチ地震救援プロジェクト

【報告】

2012年8月には現地を訪問し、「ACSIS」のマイクロクレジットなどのモニタリングを行いました。また、新たに「日本ハイチ協会」の拠点支援を行いました。同団体は、ハイチで日本語教室や日本文化紹介などの交流活動を行っています。

さらに日本人医師でシスターの須藤昭子さん(クリスト・ロア宣教

修道女会)の設立したNGO「GEDDH」と農業技術学校の建設を支援することが決定しました。

10周年記念シンポジウムではGEDDHのジャン・クロード・レフェルブさんをパネリストの一人として招き、東日本大震災被災地を訪れ、被災者との交流を行いました。

【計画】

シスター須藤らの提案により学校建設および運営を円滑化するためGEDDHを含め専門家や学校関係者やCODEで構成する委員会が設立されました。今年5月には芹田代表理事と吉椿事務局長がハイチを訪問し、委員会メンバーとともに学校建設の詳細が話し合われました。まもなく委員会によって耐震性を重視した学校建設が行われます。今後、学校運営についての協議も行っていきます。また、シスター須藤が帰国後、報告会を行うことも予定しています。

青海省地震救援プロジェクト

【報告】

2011年度よりチベット人には欠かせない牛である「ヤク」を住民に貸し出す「ヤク銀行プロジェクト」の実施に向けて、カウンターパートであるインドネシア人アラフマイアニさんと協議してきました。

2012年度は7月にはスタッフを現地に派遣し、ラブ地域で実施されること決定し、現地、住民や僧侶、ヤクのドクター、遊牧民などにより構成された「ヤク銀行委員会」が設立されました。今後この委員会によってヤクの購入、住民へのヤクの貸し出しが行われます。

【計画】

今後は、「ヤク銀行」プロジェクトが具体的に動き出します。「ヤク銀行委員会」のメンバーと数回の協議を終え、現在、委員会によってヤクが購入され、その後遊牧民たちに提供します。また今後、ヤクの生育状況、遊牧民の暮らしの様子、ヤクを貸し出した被災者の現状などを現地から伝えてもらい、ヤクオーナーやCODEの支援者の方々に発信していきます。また日本では引き続き新たなヤクオーナーの募集を継続していきます。

インドネシア・ジャワ島中部地震救援プロジェクト

【報告】

「呼び水プロジェクト」として、ナワンガン集落において水道管敷設を支援し、これを機に集落の人々は水と農業の問題に向き合い、集落が抱える貧困・若者の都市への流出についても住民自ら取り組みはじめました。

2011年、現地キーパーソンがプロジェクトに密に関われなくなったことから、住民は「今の生計手段の延長でできることから始めたい」との結論に至りました。一方、2010、2011年に続き2012年度も、神戸学院大学浅野壽夫教授の授業「海外研修」で同集落へのフィールド研修に同行させていただき、情報収集を行いました。

【計画】

現地住民の新たな動きに関して現地キーパーソンを通して情報収集を続けます。また2013年度も神戸学院大学の浅野壽夫教授の授業「海外研修」にスタッフが同行させていただき、今後も継続した関わりを追求していきます。

東日本大震災救援プロジェクト

【報告】

CODEに集まった支援金を、発足以来連携している被災地NGO協働センターを通して被災地支援に活用して貰うとともに、2011年4月1日から半年間同NGOにスタッフ二人を送出させました。

また、2011年度は四川大地震の被災者3名が、2012年度はCODE E10周年シンポジウムのために招聘した3か国のゲストが、東日本大震災の被災地を訪れ、被災者どうしの交流および情報交換を行いました。

【計画】

国を超えた被災者どうしがつながることは、CODEの理念である「支えあい・学びあい」の実践のひとつです。この交流がCODEや各国の被災者にとって非常に有意義であったことから、今後も同様の事業を展開していきます。

寺子屋セミナー

2012年度より若者を対象とした「CODE寺子屋若者編～今、若者に伝える、17年間の救援思想～」を実施し、村井理事や現場スタッフの話からCODEが過去に行ってきた救援活動を振り返り、そこから理念や支援内容について学びました。2012年度には7回実施し、2013年度には5回の実施を予定しています。

機関誌、インターネットなどによる災害情報の発信

機関誌CODE Letterの発行やHPメーリングリストなどで定期的に情報の発信を行っています。また、2012年度よりTwitterやFacebookなどのSNSを利用した情報発信を開始しました。また今年度より、過去を振り返ることで災害を風化させず、またそこから得た教訓を思い起こすことを目的として、毎月災害が発生した日に「災害を忘れない」と題したメールを発信しています。

関係機関とのネットワーク構築

神戸学院大学、関西NGO協議会などからの依頼による授業企画及び講師派遣、その他正会員加盟やシンポジウムなどの実行委員会や運営委員会への参加などを通じ、関係団体とのネットワーク強化、構築を行いました。また2013年度も、随時国内外の団体とのネットワーク強化、構築を行います。

CODE10周年シンポジウム

NPO法人10周年を迎えるのを機に、2013年2月2日にCODE10周年記念シンポジウム「寄り添いからつながりへ」を開催しました。芹田代表の基調講演では、「最後の一人まで」にこだわるNGOのあり方が示されました。ルトフ・ラフマンさん(アフガニスタン)、彭廷国さん(四川省)、ジャン・クロード・レフェルブさん(ハイチ)の3名がゲストとして来日しました。パネルディスカッションでは、各国のゲストからCODEの救援が与えた影響やこれからのCODEに求めることが述べられました。またシンポジウムの一環として、若者ポスターセッション「海外災害支援～次世代からの提案」を開催しました。大学生の海外の被災地を想定した積極的なプロジェクト提案がなされました。報告書が3月31日に完成し、2012年度で本事業は終了しました。

6月15日(土)18:30~21:00、食事会「CODEのタベ」を開催しました。これは支援者や会員との交流、事業の報告を目的に行っており、今年は27名の方にご参加いただきました。

今回はアフガニスタン、四川省地震、ハイチ地震、青海省地震の各救援プロジェクトの報告を行い、現在実施しているプロジェクトや救援の背景となった災害や紛争がスタッフから紹介されました。また災害で傷ついた姿が多く紹介される一方で、被災地には多くの素晴らしい風景や人々、文化があることを知ってもらうことを目的として、スタッフが制作したこの4つの国・地域の紹介映像をご覧いただきました。

ご参加いただいたコープこうべ前常任理事の秦正雄さんは、「長い間続けてきたCODEへの支援を通じて、徐々に築き上げることができた。」と述べ、市民の集まる場としてCODEのあるべき姿を再確認することができました。また室崎益輝副代表は「CODEのタベは1年に1回の温かい場所だ。」と述べ、この会が、想いを共有している人たちと顔を合わせる貴重な場であるということを伝えました。ご参加いただいた方々には厚く御礼申し上げます。



▲会場の様子

CODEはこれまでに51回の救援活動を行ってきました。しかし多くの災害は、報道が終息すると同時に人々の記憶から忘れ去られていきます。まだ被災から立ち直ることができない人、避難所暮らしを強いられる人がいても、情報が少なくなることで災害が終わったように認識してしまいます。また、その災害によって得られたはずの経験を忘れることによって、次に災害が起こったときにまた同じ被害を出してしまいます。

CODEは本年度より、メーリングリストやFacebookで毎月、災害の起こった日に「災害を忘れない」と題した情報を発信しています。これまでにイタリア中部地震(2009年4月6日)、青海省地震(2010年4月14日)、四川大地震(2008年5月12日)、ジャワ島中部地震(2006年5月27日)、メキシコ地震(1999年6月16日)の5つの災害をとりあげました。

インドネシアのシムル島では過去に何度も津波が襲っていて、津波が来たらどのように行動するかということが言い伝えとして伝わっていました。災害を忘れずに、学び、それを伝えることが減災にもつながります。(上野 智彦)

イベント情報

CODEでは様々なイベントを行っています。また事務局では広報活動の一環としてFacebookとTwitterを利用しています。世界の災害情報やイベントや救援活動の振り返り、ニュースなどを配信しています。ぜひご一読ください。

CODE寺子屋セミナー 若者編

「いま、若者へ伝える、17年間の救援思想」

CODE10周年を機に、次世代を担う若者にこれまでのCODEの活動を伝える講座「いま、若者へ伝える、17年間の救援思想」を2012年4月から全10回シリーズで開催しています。設立から2012年度までの事務局長として救援プロジェクトをコーディネートしてきた村井雅清が、各プロジェクトにおける学びや人々との出会い、その根底にある救援思想をお話します。NGO、防災、国際協力などに興味がある若者の皆さん、お気軽にお越しください。第10回 「イタリア中部地震、青海省地震」

日時:7月27日(日)10:00~12:00

場所:CODE事務所

東日本ボランティア活動報告会

「若者の視点から見た東日本大震災

～これからの日本大震災被災地を考える～

東日本大震災で協働した被災地NGO協働センターのイベントです。現在も、被災地にはまだまだ課題が存在します。そこで、東日本大震災以来、活動を続けてきた被災地NGO協働センターと神戸大学東北ボランティアバス、不良ボランティアを集める会のメンバーによる報告会を開催し、現在の被災地の課題を明確にし、今後の支援活動の在り方を考えます。

日時:7月27日(土) 18:00~20:30

場所:神戸市勤労会館 講習室403

(阪急・阪神「三宮駅」から東へ徒歩5分)

定員:50人(先着順) ※下記問合せ先まで申込み

参加費:500円 当日会場でお支払いください

問合せ先:被災地NGO協働センター

TEL/ 078-574-0701 FAX/ 078-574-0702

E-mail/ ngo@pure.ne.jp

いつもCODEの活動にご支援・ご協力いただきありがとうございます。

冒頭の基本方針でも触れられているように、2013年度に入り、地震をはじめ、洪水、竜巻などの災害が世界中で頻発しています。CODE事務局では常に情報収集を行い、メールやソーシャルメディアを通じて皆様に発信しています。災害はいつどこで起こるかわかりません。これからも常に世界中の災害に目を向け、支援を求める声にすぐに対応できるように、ぜひ継続的なご支援をよろしくお願い致します。

これまで通りの会費やご寄付はもちろんのこと、皆様の地元の報告会や講演会の企画、開催という形でも、ぜひCODEの一員としてNGOの活動に関わってみませんか。

プロジェクト費以外の事務・管理費に役立てさせていただく「一般寄付(カンパ)」もお願いしております。既に今年も会員となつた皆様、寄付を下された皆様には重ねてのご案内となり、申し訳ございません。引き続きどうぞよろしくお願い致します。

☆CODEに対するご意見、アドバイスを何なりとお聞かせください。

会員・寄付者ご芳名(順不同・敬称略)

2013/4/1～2013/6/20

◆一般寄付(災害救援への寄付は除く)

後藤秀夫、柚原里香、神戸YMCA、田中、菊田歌雄、塚本謙三、鶴飼愛子、金持伸子、杉山百合子、村田漁村、井上由紀子、三島宣彦、土屋芳久、桂光子、大江良一、藤田利子、大槻輝美、山田千恵子

◆会 員

《正会員》

室崎益輝、黒田裕子、榛木恵子、松本誠、村井雅清、村上忠孝、中川和之、飛田雄一、橋口文博、牧田稔、明石和成、鶴飼卓、草地とし子、コープこうべ、神戸YMCA、特定非営利活動法人JIPPO

《賛助会員》

【個人】

伊永勉、菊田歌雄、原ちえこ、鶴飼愛子、増田末知子、村上宏、田辺エツ、兵藤晴喜、野本英晴、加藤雄司、金持伸子、中村大蔵、鄭恵姫、小林孝信、自敬寺 服部、井上由紀子、江口節、三島宣彦、上田耕蔵、桂光子、片岡幸壺、山添令子

【団体】

(有)村井新聞店

次号の予定

- ・特集 アフガニスタン救援プロジェクト(予定)
- ・救援プロジェクト活動報告

4月1日～16日 青海省派遣(アラフマイアニさん)

4月14日 第7回CODE若者寺子屋
「スマトラ島沖地震及び津波」

4月18日 CODE理事会

4月22日 MBSラジオ出演(吉椿、四川省雅安地震)

4月23日 ラジオ関西出演(吉椿、四川省雅安地震)

5月9日 ポストHFAへの市民社会からの提言集
策定WSに参加(村井理事)

5月11日 神戸新聞社会賞授賞式参列
(芹田代表理事、室崎副代表理事、
村井理事、細川、吉椿)

5月12日 第8回CODE若者寺子屋
「パキスタン地震・ジャワ島地震」

5月20日～6月2日 ハイチ派遣 (吉椿)
(芹田代表理事、5月20日～26日)

5月24日 NGO・JICA協議会コーディネーター
戦略会議に参加(村井理事)

6月7日 NGO・JICA協議会コーディネーター
会議に参加(村井理事)

6月15日 CODE理事会、総会、CODEのタベ

6月19日 平成25年度第1回NGO・JICA協議会に参加
(村井理事)

6月21日 兵庫県立大学学生ヒアリング(吉椿)

6月23日 第9回CODE若者寺子屋
「バングラデシュ・サイクロン
ミャンマーサイクロン、四川大地震」
(村井、吉椿)

6月27日～7月4日 災害看護支援機構 ハイチ視察同行(吉椿)

※なお前年度同様、神戸学院大学防災社会貢献ユニット社会貢献
論 I(前期13コマ)を当NGOとのコラボレーションで行いました

《編集後記》

「NGOに参加したい。」CODEの門戸を叩いて早くも1年半が経つ。最近ふと思うのは、「運が良かった」ということだ。

はたして「NGOに参加したい。」と思って、本当に参加し、続けていける人がどれくらいいるだろう？私がCODEに参加した一方でNGOへの志を諦めてしまった人がいるかもしれない。しかし、多くの団体は若者を育てる余裕がない。もし参加することができたとしても給料が少なく、生活が厳しいという人もいる。

しかし、NGOは志ある若者にとってもっと気軽に入って行ける場、夢のある場であるべきだと思う。運が良くて参加できたのではなく、将来の職業の選択肢として普通に「NGO」というものがあればいいと思う。

そして、若者が迷いなくNGOの世界に飛び込んでいけるサポートが必要だ。まだまだ未熟で若い私たちが、いつか市民活動を引っ張っていけるように、少しでも後押しをしてもらえたらと思う。

(上野 智彦)